
二番目に好きなひと

悠木おみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一番目に好きなひと

【Zコード】

Z3615Z

【作者名】

悠木おみ

【あらすじ】

「私は、好きな気持ちを言葉にしなかった。ただ、それだけのこと」

幼馴染と親友は、実里にとって何よりも大切だった。友情で繋がれ、穏やかで楽しい時間を過ごしていた三人。けれど友情が愛情に変わった時、歪になつた三角関係は実里に選択を迫つた。

幼いころから持ち続けていた恋心の行き場を失つた実里は、自ら幕を引くしかなかつた……。

無機質とも思えるほど寒々とした家具が置かれている部屋の中を照らし出すのは、月と星の輝きだつた。

コンクリートの壁と床。リビングから扉を開けた所にある唯一の部屋には、鉄パイプのベッドが置かれていた。

ベッドの上部 枕元とでもいえばいいのだろうか には平べったい鉄枠の本棚と、本棚に入りきらなかつたのだろう、その前に平積みされている本だけが、その部屋からは浮いていた。

ベッドの鉄枠に背中を預けながら、少女が一人、月に照らされた部屋の中で携帯電話のディスプレイを眺めながら、酷薄に嘲笑（わら）つた。

「……“のん”は、幸せ？」

問い合わせは、画面の向こう側の少女に向けられていた。華やかなブラウン管の向こう側の世界で無垢を象徴する白のドレスをまとつた少女は、頬を染めて微笑んでいた。

少女の笑顔に釣られたかのように、こちら側の少女も微笑んだ。その瞬間、赤の他人のはずの二人の少女は双子と見間違つほどに似通つた。

「大好きだったはずなのに、な……」

物が置かれているはずなのに、少女の口から零れた言葉は部屋中に反響して少女の元に戻つた。それに苦笑した少女は、五百ミリリットルのペットボトルに残つていた液体を飲み干し、空になつたペットボトルを力いっぱい壁に向かつて投げつけた。

乾いた音が、部屋いっぱいに響いた。その音に、衝撃に、少女は

可笑しくもないのに乾いた笑いを唇から零した。

「もう良い。イラナイ……のんに、全部あげる」

幸せそうに微笑む二人を写していたニユースを携帯の電源ごと、少女は自分の目の前から消し去った。漆黒のディスプレイに一つ口付けを落とした少女は、そのまま携帯を手の届かない場所へと放り投げ、剃刀を手に取つた。

「バイバイ、のん」

その言葉を最後に、少女の意識は闇に落ちた。

無造作に切り裂かれていたのは、闇に映える少女の白い首筋だった。少女の体はずるずると力を失い、冷たいコンクリートに触れた。月に照らされた少女の表情（かお）は、安らかだった。首筋からは血が、伝つて零れ落ちた。

× × × ×

『 delta 様』

白い扉に貼り付けられている紙を視界に入れた少女は、ドアノブを見て思案すると音を立てないように扉を開いた。

扉に背を向けている少女 相方の姿を確認した少女は、何かを見つめて悩んでいる少女の背中に回ると、抱きしめた。

「何しているの？」

「実里！」

するりと細い腕を回して抱きしめた“侵入者”に少女は過剰なほ

ど驚き、それをやつてのけた実里（みのり）に非難の声を上げた。

「もう。どうして音を立てないで入つてくるの？ びっくりした！」

「だつて、のんにしては珍しく考え込んでいるみたいだつたし」

のん 希（のぞみ）に回していた腕を放し、笑いながら希から離れた実里に、希はどこか困ったように笑つた。

「ん……ちょっと、ね……」

言葉と同時に携帯電話を閉じた希にかなりの不自然さを感じた実里は、軽く首を傾げた後に頷いた。

「ホソカワくんだけ？ 連絡、来ないの？」

「じそ」セと自分の鞄の中から財布を取り出した実里は、希には視線も向けずに聞いた。だが、実里の口から出てきた名前に反応して、希は頬を染めながらも、脱力したかのように頭をたれた。

「相変わらず耳が早いね、実里は……まだ実里には言つてなかつたと思つたけど」

「そうだね。のんからは聞いてない……何か飲む？」

「ありがとう。でも、今はいらない」

どこか困ったような笑顔で告げた希を見ながら、実里は軽く頷きながら楽屋のドアノブに手を触れて、すぐに手を離した。

それと同時に一步引き、扉から離れたところで扉が開かれた。

「よつ」

軽い挨拶とともに現れた青年を目にした実里は、軽く眉を寄せて青年をねめつけながら楽屋に向かい、あからさまにため息を吐いた。

「何の用？ アキ」

「陣中見舞。それにしても相変わらず冷たいな、姫」

「何が“姫”よ。優しく歓迎したつて不気味がる癖に」

ポンポンと弾むように言い合ながら、実里はアキから“陣中見舞い”的缶を一本受け取り、目を丸くしている希に向き直つた。

「のん、つるやくべじ」めんね。……『Heil(ハイル)』は知ってる、よね？」

アキから渡された缶の一本を希に渡し、プルトップを空けながら実里は首をかしげた。

「Heil、の……陽？ みのり、仲良かつたの？」

「コレとは従姉弟なの。芸能界に入る前からの腐れ縁」

缶を手渡されたまま驚いて目を瞠らせている希の様子に、実里は

アキ 陽（アキラ）を睨みつけながら息を吐いた。

「コレって言い方は無いだろ、ノリ」

「アキだつて、メンバーに紹介する時はコレって言つたじゃない。

……それより、良いの？」

「あ、そうだな」

言い争いというにはオーバーだが、再び希を置いてテンポ良く会話を始めた自己嫌悪と陽の態度に軽くため息を吐いた実里は、脱線した話の修正を促した。

「はじめまして、Heilの陽です。いつもノリ 実里が迷惑かけてくると思つけど……見捨てないでやつてくれると……」

「あ、delt aの希です。じつはいつも実里にはお世話になつて……」

硬くなりながら頭を下げあつ一人に再びため息を吐き、陽の言葉に眉を寄せた実里は、陽を軽く小突いてから希に向き直つた。

「のん、アキはデビュー時からのんのファンなの。陣中見舞いや私はこじ付けで、のんに会いに来ただけだから……放つておいていいよ」

「ノリ……」

疲れたとはまた違つが肩を落として名前を呼んだ陽に、実里はソノと顔を背けて口を開いた。

「事実でしょ？ それにHeilのメンバーに挨拶に行つた時、似たようなことを言つたのは誰だったでしょうね？」

「まだあの時のことを根に持つてゐるのか？」

「さあね。私は誰とは限定していないわよ？　“根に持つている”つていうのはアキの主觀でしちゃう」

「Heiseiの時のことを持ち出した時点で、根に持つてること明白じやないか。第一……」

くすくす

段々ヒートアップしていた二人の言い争いを止めたのは、一人の声に比べれば微かと言つてもいい、希の零した笑い声だった。

「ごめんなさい……二人とも、本当に仲が良いのね」

希の言葉に毒氣を抜かれたのか、実里と陽は顔を見合させて息を吐いた。実里はそのまま陽に椅子を勧めると、持ちっぱなしだった財布を鞄の中に片付けた。

「だからアキとは腐れ縁なだけだつて」

ポツリ、とつぶやいた負け惜しみにも似た言葉は、希の笑いを誘つただけだった。

気心の知れた大切な『従姉弟』と、半身に近い大好きな『親友』。二人と一緒にいると、頑張れた。

スケジュールをできるだけ調整して、陣中見舞いの名目で樂屋を行つたり来たりして。バタバタと慌しく、でも楽しい日々を過ごしていた。

この世界に“変わらないもの”などないと知っていたはずなのに、ずっとそんな日々が続くものだと思い込んでいた。三人で過ごす、日々が。

× × × ×

「お疲れ様でしたーっ」

「お疲れ様〜」

軽く掛けた挨拶に当たり前のように返される言葉を聞きながら、実里はスタジオを後にした。

「あれ〜？ のん？」

物陰を覗き込むようにひょっこりと顔を出した実里だが、想像に反してそこに希の姿はなかつた。

「さき、行つちゃつたのかな？」

「みのりちゃん、お疲れ様」

「あ、お疲れさまです」

掛けられる声に返事を返しながら、希の姿がないことに軽く首をかしげながらも実里は楽屋に向かつて足を進めていた。

「何も言わずに先に行くなんて、珍しい……」

「 希」

弦くように零しながら楽屋のドアノブに触れた実里は、扉を開こうとしたところで手を止めた。

聞こえてきたのは陽の声。実里と掛け合いをしていくような軽い声ではなく、真剣なその聲音にさすがの実里も扉の前で硬直した。

「……つて」

「出来ない……希が、泣いて……」

「つ」

ポツポツと途切れながらも零れて漏れてくる声は、実里が間違えようもなく聞きなれた希と陽のものだった。

けれど実里の知る一人の聲音とは明らかに違ひやの声に、実里はドアノブを回すことも出来ずに、そこに立ち止むことしか出来なかつた。

どくん

シリアルスな一人の雰囲気に呑まれたのか、実里は自分の心音が嫌というほど大きく聞こえた気がした。

(怖い)

一人の空氣に、その雰囲氣に、とつたに実里の心の中に浮かんだ

のは、純粹な恐怖だつた。

(聞きたくない)

恐怖とともに浮かんだ言葉は、明確な拒絕だつた。隠し様もない
その本音に従いたいという気持ちとは裏腹に、実里の体はその場か
らぴくりとも動こうとはしなかつた。

「陽には関係ないでしよう！？」

「オレは、希が好きだ」

決定的、だつた。

陽の告白と同時に、楽屋の中では希が泣き崩れていた。たつた一
枚。薄い扉を隔てた実里は、希の慟哭を聞きながら、物音を立てず
にその場を後にした。

× × × ×

頬は薔薇色に染め上げられていた。緊張からか、羞恥からか、瞳
は今にも涙が零れそうに潤んでいた。

何か言いづらい、けれど言いたいことがある希に気づきながら、
実里は敢えてそれに触れずにいた。

希が何を言いたいのか、実里は理解していたから。

「実里、私ね……」
「例の“ホソカワくん”とでも進展があった？ なんか幸せそくな
表情（カオ）してる」

敢えて言へ。

あの事を実里は知らない。希はそう思つてゐる。だから実里の知
りえる情報だけで聞き、希から否定の言葉を待つていた。

「…………うん。友宏（ともひる）……細川くんとは、別れたの。で
も」

「？…………いいけど。変な男には捕まらないでよ～？ のんつて
恋多き女だからねえ」

「…………うう……そんな事は……無いとも思つんだけど」

からかう様にませ返した実里は、希に気づかれないように一つ息
を吐き出すと一転、真剣な表情で希の双眸を見つめた。

「で、じつじたの」

「うん……あのね、陽くんと付き合つことになつたの」

緊張で上氣した頬、潤んだ瞳、微かに震えながらも告げられた決
定的なその言葉に、実里は敢えて目を丸くした。

「アキラあ？ つてもしかしながらアキ？ ハートの…？」

「うん」

ずきん

当たり前のよう胸が刺すように痛んだ。けれど実里はそれに気づかないように、そして希に気づかれないように驚愕の表情を作つてから、希に詰め寄つた。

「いや、まあアイツならその辺のチャラいやつらなんかよりは百倍はマシだうけど、本気で良いの？　まあのんが良いなら別に私は良いけどさあ」

「ひや……百倍はマシって……実里、いくら従姉弟で氣の置けない関係だつて言つても、それは言い過ぎー。陽くんは素敵な人よ？」
「ははーん」

(笑え)

ズキズキと当たり前のように痛む胸とは反対に、顔には笑顔を浮かべる。心中で自己暗示をかけながら実里は意識して口元を上げ、言葉には意味を含ませた。

「えつ……みのりー？」

実里の狙い通り、希は案の定顔を真っ赤にさせながら慌てふためき始めた。

「ちよ……まだ何もないからねー？　へ、返事だつてゆつぐりつて……」

「いいから、いいから。いいねえ、青春だねえ。のんもアキも売れつ子だから、下手に事務所にばれたりマスコミに暴露されたりしないように気をつけなねえ」

「もう！　からかわないでよ！」

軽口を叩きながら痛む胸を無視して、実里はこの世界で出会った半身とも言える唯一無二の相棒である希に笑つてみせた。

ただ、田に映るものをぼんやりと見ていた。表面上だけは笑つて。最低でも、一人だけには気づかれないように。

意識と氣力を“一人”に割いていた実里は、不意に近くに寄つてきた氣配に視線も向けずに沈黙した。

無関心を貫く実里をどう思つたのか、“彼”は苦笑したらしく。氣配だけでそれに気がついた実里は、けれど何の反応も返さなかつた。

「“じつこ”でも、形にはなつてきた」

具体的で重要な言葉は何一つ表さず、けれど的確にそれを言葉にしてみせた男性に、実里は顔を動かさずに視線だけを向けた。

「いまさら? ……遅すぎるわ」

「確かにね」

笑い方が、微かに変わる。苦笑というよりは、困ったような表情で言葉を零した男性に、実里はようやく顔を向けた。

「何の用? 晃」

「打ち上げなのに、楽しそうじゃないから。なんとなく、かな?」

「なんとなく、ね」

誤魔化すように肩を上げる。意味深な発言で心に入り、肝心な言葉は曖昧にして濁らせる晃(ひかる)の手口に、実里は呆れたような息を吐いた。

「……お互に理由が必要で、踏み込まれたくないって判断か。相変わらず抜け目がないというか」

「誉め言葉だね」

意識をせずに零れた実里の言葉に、晃は躊躇つこともなくさらりと返す。陽では絶対に望めない態度に、実里は再び息を吐いた。視線を晃から外して、晃が来るまで見ていた方へ戻す。ところどころ位、幸せそうに微笑む希を、実里は表情を変えることなく見つめていた。見つめていたといつよりは、見据えていたといつほうが近い。

それこそ、親しくない人間が見れば、幸せな希を実里が妬んでいるかのように見える程度に。

「で？」

視線と意識を全て希とその横から片時も離れずにいた陽に向けながら、実里は未だに近くに立つたままの晃に問い合わせた。

晃の視線も実里にはない。けれどあからさまに存在する晃に、実里は鬱陶しさを感じると同時に、焦っていた。

「唐突だね」

「駆け引きは嫌いなの。晃が相手だと余計に……手の中で踊らされてる気がするから」

近くにいながら全く意識していないように装っていた晃は、焦れた実里の言葉に楽しげに笑った。

「それは光榮」

「本当に何？」

それ以上からかうと返答が貰えなくなることを危惧したのか、晃は笑つたままの表情を崩さないまま、真剣な声音を実里に向けた。

「ここまでそうしているつもりだ？」

「……誤魔化すのは簡単だけど、面倒だものね。でもその答えは晃に話さなくてはならないこと?」

「……いや」

視線を希たちに向けながら、微笑を浮かべながらも実里は凍えるような冷たい声で晃の疑問に答えた。それは晃が望んだ答えとは違うと二人とも理解してはいたが、晃はその言葉でそれ以上実里に踏み込むことを断念した。

「理解しているならいい。気づかないままだったら、哀れだと思つただけだ……誰にとつても」

「……晃も大概意地悪よね」

それでも最後に突きつけられたその“現実”に、実里は表情一つ変えないままでありながらも呟いた。実里の抵抗にもならないその言葉に、晃はやはり苦笑しだけだつた。

表情を変えなくても実里の不機嫌さを感じていた晃は、打ち上げが終わるまでただ実里の傍いた。

そのことを不信に思いながらも、それ以上心をかき乱されなかつた実里はそれを許容した。

× × × ×

実里がそれを知ったのは、なんとなく付けていた夕方のテレビ、その芸能ニュースが一番最初だつた。

『ノゾミさん妊娠しているというのは本当ですか?』

想像もしていなかつた言葉に、実里は持つていたマグカップをそのまま床に落とした。高さはあつたがカップの底から落ちたことが

幸いしたのか、カップは割れずに大きな音を立てながら中身だけを撒き散らせていた。

マグカップに視線も向けず、温度も感じていないのか、淹れたてのコーヒーを踏みつけながら実里の視線はテレビに固定されていた。

『はい。でもだから入籍した、というわけではありません』

『少し前から婚約はしていたんですね』

無垢を象徴する真っ白なドレスをまとった希と、実里には見慣れないースーツを着込んだ陽が笑いながら告げる言葉に、実里はただ衝撃を受けていた。

『デルタの活動はどうなりますか?』

『私は、お休みをいただくことになります』

『実里さんやHei1のメンバーからは何か言われましたか? お祝いの言葉などは?』

『実は晃……リーダー以外には秘密にしていたんですね』

そこまで聞いて、実里は無造作にテレビの電源を落とした。

落としたマグカップを拾つて、雑巾でコーヒーを拭う。機械的に黙々と床を吹きながら、実里は自嘲にも似た笑みを浮かべた。

『そういう事……』

口にするつもりの無かつた言葉が、自然と零れ落ちていた。

『理解しているならいい。気づかないままだったら、哀れだと思つただけだ……誰にとつても』

晃の意味深な言葉と態度。あの時に全てを理解していたわけでは

ないその言葉の意味を、実里はようやく実感できた気がした。

「……だから嫌いなのよ……晃なんて……」

誰に告げるわけでもないその言葉は、そのまま部屋に消えていった。水道の蛇口を無造作にひねり、勢いよく出た水でマグカップを洗う。

床を拭った雑巾はそのままごみ箱に捨てて、冷蔵庫からペットボトルを取り出し、洗面所で大きなバスタオルと剃刀を手にした実里は、そのまま浴室へと戻った。

無機質な家具が置かれている。鉄枠の本棚とその前に無造作に平積みされている本だけが、寒々としたその部屋に彩りを『与えるのと同時に明らかに浮いていた。

漆黒が包み込んでいる部屋の中で、携帯電話のディスプレイが煌々と辺りを明るく照らしていた。

「のんは、幸せなのでしょう?」

それは答える返つてはこない。けれど実里には想像のつづラウン管の向こう側で微笑む少女への質問だった。

「バイバイ、のん」

その言葉を最後に、実里は自分の首筋に当っていた剃刀を思いつき引いた。動脈に沿つて縦に引いたその線は、禍々しいほどの紅い飛沫を上げた。

【番外編 1】嘘ではない一瞬の表情

視界全体を覆い尽くす透き通つた青。日の光を反射して揺りめく水面にさした影を訝しく感じた実里（みのり）は、水中から顔を出した。

「……アキ？」

「よつ」

プールサイドから軽く掛けられた声に溜息を零した実里は、そのまま水面から上がりバスタオルと共に渡された缶のブルトップを引つ搔いた。

「何？」

「わかつちゃいたけど、機嫌はよくなさそうだな……ま、当然か。叔父さんと真里（まり）さんが盛大に遣り合っていたし……ノリは嫌なことがあると、必ずここに来るな」

「水の中にいれば、何も聞こえない……何も考えなくて済むもの」バスタオルを頭から被り表情を上手く隠した実里は、缶の中身を半分ほど飲み干してからゆつくりと飲み口から唇を離した。

「幼馴染で腐れ縁のベストカップル。おまけに学生時代は誰もが羨むほどの恋人同士が聞いて呆れるわよね……ひとつと別れちゃえば楽なのに」

「ノリ」

咎めるような陽（アキラ）の声に、実里は酷薄に笑つてみせた。
「だつて、そうでしょう？ 寄ると触るとケンカばかり。私たちが繫がっているのは、たかだが紙切れ一枚の関係」

淡々と事実を言葉にする実里は、けれどその事を自分に言い聞かせるのと同時に自分自身を傷つけていた。

それを理解している陽は、ただ深く溜息にも似た息を吐き出した。

「やめろよ」

「なにが？」

理解しているのか、していいのか。それを悟られたくないから

なのか、実里は敢えてそれを言葉にしながら嘲笑（わら）った。

「そりやつて自嘲じみた事」

「自嘲？ 何それ」

「違うな……言葉での自傷行為、だな」

その言葉に実里はあからさまに眉を寄せ、陽を睨み付けるように見据えた。

「何のことがわからないわ。私は、血を流してなんかいないもの」「本当はわかっているんだろう？ ……ノリの心は、血を流している。愛を求めて、泣いている」

頭に引っ掛けっていたバスタオルを振り払った実里は、まだ中身の残った缶を足元に置くと体から力を抜いてプールに倒れこんだ。

「ノリ！」

人の倒れこんだ重い音と派手な水飛沫。派手な水飛沫の中で実里は陽に背を向けていた。

「……いずれ全てが無意味なものになるのなら、私は愛なんて要らない。私は、永遠なんて信じない」

実里の言葉は、明確な“拒絶”だった。先ほどからは考えられないほどに、静かに、まるで溶けるかのように水に潜った実里を見つめながら、陽はただ溜息を吐き出した。

× × × ×

睨み付けるように斜め前を見据えていた実里は、不意に哀しげに顔を伏せた。無造作だったのか額に巻かれていたはずの包帯が解けて、実里の横顔を隠す。

茫漠とした砂漠の中に置かれた崩れた遺跡に腰掛けていた実里は、解けた包帯はそのままに、両足を胸に抱え込むようにして座つてい

「た。

誰にも聞こえないような微かな声。まるで唇を動かしているだけの様子で何かを告げた実里は、表情を隠したまま“消えた”。

「お疲れ」

頬に当たられた缶の冷たさに眉を寄せながら振り返った実里は、その犯人を無言のままにらみ付けた。

クリーム色に近い茶色の長い髪、灰色にも見える紫の瞳。かつては白かつたと思わせる崩壊した神殿に腰掛けて消えたのは、憂えた瞳の傷だらけの翼の無い天使。

Hei-1の新曲のプロモーションビデオに出てくる少女の姿をした天使。男性四人のメンバーはその天使役に困った末、陽はその役を身近な女性つまり従姉の実里に与えることにしたらしい。

何も知らなかつた実里は当日の朝、まだ寝ぼけていたところを陽に連れ出された。実里が混乱している間に着替えとメイクをスタッフに手早く終えさせると、セリフに放り込んだというわけだった。

「…………あー……機嫌、悪い?」

「…………」

騙まし討ちで連れて來たといつ負い目があるのか、気まずそうな表情で缶を差し出す陽に一つ溜息を吐くとそれを受け取つた。

「私の出演料、缶ジユース一本じや済まないからね」

「あー…………うん…………いや、わかってるって」

軽くねめつけながら[冗談交じりに告げた言葉に、陽もそれを理解

しながら視線を泳がせてから頷いた。

付き合いのいい陽に軽く気持ちを浮上させながらも、実里は無意識のうちに溜息に吐き出していた。

「でもコレ、私じゃなくても良かつたと思うけど」

「天使？……外見だけならまあ確かにノリだけじゃなくてもどうにかなつたかもしれないけど、性格も含めたら条件はそれなりに厳しいからなあ」

「……性格？」

訝しげな表情を浮かべた実里に、陽はあからさまに視線を逸らしてから溜息を吐いた。

「晃……ウチのリーダーは仕事にとても真面目なので」

「……真面目」

プルトップをカリカリ引っ搔きながらオウム返しに言葉を返した実里を見ながら、陽は缶を引き取つてふたを開けた。

そのまま缶を実里の手に返した陽は、ちらりとセットに立つ晃（ヒカル）に視線を向けて溜息を吐いた。

「仕事が出来ないような人は無条件で却下なわけですよ」

「ああ」

誤魔化すかのように具体的な言葉を告げずに呴いた陽の様子に、実里はちらりと視線を向けると頷いて缶に口付けた。

視線の先には、先ほどの実里の映像を厳しい表情でチェックしている晃の姿があつた。

Hei1の中でボーカルの煉（レン）に次いで人気のあるリーダーの晃。その姿は、普段彼がメディアで見せている表情よりも厳しく、ミーハーなモデルを拒む雰囲気を十分にかもし出していた。

「……真面目ねえ……っ

視線を晃に向けたまま呴いた実里は、次の瞬間、息を呑んだ。作り物の笑顔とは違う。映像が満足のいく出来だったのか、晃はふわりと安堵したかのような微笑を自然に浮かべていた。

「あんなふつに……笑えるんだ」

実里の無意識のうちに零れていた言葉は陽には聞こえなかつたのか、陽は首を傾げながら実里に視線を向けていた。

「ノリ?」

「うん。何でもない」

呼ばれて我に返つた実里は、目を閉じて首を横に緩く振つた。ただ晃の微笑みは、実里の目に焼きついたかのように離れなかつた。

【番外編 1】 嘘ではない一瞬の表情（後書き）

実里、芸能界入り前の小話。

実里が晃を「Hei1のリーダー」から「晃」個人として意識するようになつた切欠。

実里は自分が認めた人（個人として意識した人）以外は、助言だろうと嫌味だろうと聞き流してしまったタイプなので、本編の晃への対応は“従弟”の陽と“親友”的に希に次いで良かつたりします。あれでも。

【番外編 2】 いぢむんに恋をした

雨が降る。私の心も、体も、すべて凍えさせてしまつひつな、冷たく痛い、激しい雨が。

雨は止まずに、私から熱を奪つていぐ。誰からも必要とされず、誰にも愛されず、その雨は、ずっと止まずに私の中にあつた。

× × × ×

がしゃん、と陶器が擦れあうかのよつな音が響いて伝わってきた。ついで、甲高い声も部屋の中から零れる。

「あの子をどうしろっていうの！？　あの子を一人にして何かあつたら、保護者として世間に叩かれるわよ？」

ヒステリック気味な女性の叫びにも似た声に、返す男性の声は疲れたかなような、けれど淡々とした言葉だった。

「きみが育てれば良いだろ？　養育費は払つし、そもそも母親はきみなのだから」

「あなたがどうしても懇願したから産んだのじょう！？　私が好き好んでわざわざ“あの時期”にあの子を産んだわけじゃないわ！」

静かに、静かに。感情を含まないかのような男性の声に、女性は声高に抗議した。

「それでも母親か？」

眉を寄せて、少し声に劍を含ませる。身勝手にも思えるよつな男性の言葉を、女性は鼻で笑つて見せた。

「あなただってあの子の“父親”でしょ？……好きである子の母親になつたわけじゃないわ」

親であることを放棄したがっている一人は、リビングの扉の向こう側、薄暗い廊下でその言葉を聞いていた「少女」の存在に気付かなかつた。

二人の自身に対する明確な拒絶を知つた少女は、そのまま足音も立てずに一階に“『えられた』”子供部屋に戻つた。

× × × ×

「ひっく……ひっく……」

途切れ途切れの子供の嗚咽は、五月蠅いほど激しく降る雨音に混ざりあって、ただひたすらに寂寥感を搔き立てていた。

「みのり……ちゃん」

今にも消えてしまいそうな、柔らかい小さな少年の声。ドアから部屋の中を覗き込む少年の声に気付いた“みのり 実里”は、ぼろぼろと大粒の涙を落しながら顔を上げた。

「うえ……あきちゃん……」

その場に座り込んだままさらりと顔を歪めた実里に、陽（あきら）は慌てて実里のもとへ駆け寄つた。

「うええ……う~」

「のりちゃん、のりちゃん。泣かないで……」

ぽふぽふ、と。撫でるとも叩くともいえる、実里の頭に軽く手を乗せた陽は、声を抑えて泣き続ける実里をギュッと抱きしめた。

「のりちゃん、だいじょぶだよ」

それはまるで守るみづ。慰めるように。癒すかのよづに優しく抱きしめた陽に、実里はすがり付いた。

「…………あきちゃん……」「

しがみつくなづに陽に抱きついた実里は、時間をたっぷり使って呼吸を整えた。しばらくの沈黙の後で零れた実里の声は、酷くかすれていった。

「…………どうして、ママとパパは仲が悪いんだろう……」「

「のりちゃん……」

悲しみで震えていた実里は、不意に陽にすがり付くために回していた腕から力を抜いた。涙を流していた痕はまだはっきりと残っているのに、その表情は酷薄な笑顔だった。

「…………のり、ちゃん…………？」

泣きたいはずなのに、泣いていたはずなのに、笑っている。まるでそれしかできない作り物のような笑顔に、陽は体を震わせた。
「ママもパパも、のりがいるから行きたい場所にいけないんだって。…………のりさえいなければ、もっと可能性が広がるから。…………のりは、いらないんだって

「のりつ！」

ぱつり、ぱつりと紡いだ実里の言葉に、陽は叫ぶよづに名前を呼んだ。

「あきちゃん…………のり、どうしたら良いくこと思う？　のりのこと、だれも必要してくれない…………」

ぱろぼろと、笑いながら涙をこぼす。実里の瞳は何も映してはいなかつた。その虚無感を正面から見つめる事になつた陽は、実里の頬に触れ、視線を合わせた。

「ボクが、側にいる

決意を宿した、射抜くよづな瞳。何よりも真剣な陽に、実里は緩やかに口を開いた。

「のりの、そばに……？」

「いるよ。ずっと ボクにはのりが、必要だから」

陽の言葉に、実里の瞳にゆっくりと光が戻る。ただひたすらに、ゆっくりと静かに意思の光が灯る。

「ずっとずっと、ボクがのりの側にいる。のりがボクを必要としなくなるまで」

自然と額が触れ合つて、実里は至近距離から陽の瞳に見つめられた。その真剣な眼差しに、実里はようやく本来の実里“らしい”笑みを浮かべた。

「のり？」

「うん……のりも、あきちゃんの側にいたい。あきちゃんが側にいてくれるなら、のりはママもパパも一緒にいてくれなくとも、一人ぼっちはじやないもんね」

本当に“嬉しい”に、幸せそうに笑つた実里を、陽は思わず抱きしめていた。

「大丈夫だよ……大好きだよ、のり」

「うん」

陽の胸の中に押さえつけられるかのように抱えられた実里は、それでも幸せを隠し切れずに微笑みながら体を陽に押し付け、背中に回した手で服を握りしめた。

「あきちゃん、あきちゃん、だーいすき！ ありがと……アキ」

陽は無意識に、実里をつなぎ止めるために必死だった。
実里は意識して、緊張でドキドキしながら。

その日、二人は初めて互いの名前に敬称を付けずに呼んだ。それが切欠。それが一番最初。それが、始まり。

【番外編 2】 いちばん恋をした（後書き）

イメージとしては幼稚園年長～小学校3年くらいまでの間。最初はお約束通り「大きくなつたら結婚しよう」みたいなことを言わせようと思っていたのですが、いつの間にか「ずっと側にいる」に変わっていました。

どちらにしろ実里からしてみれば陽は「嘘つき」になりますが、後半だとお互いの認識の違いなので、陽は嘘をついてはいないというか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615n/>

二番目に好きなひと

2010年10月8日13時51分発行